

日本海沿岸に所在する古代仏教寺院の立地と景観に関する基礎的研究
～北陸地方を中心に～

松葉竜司

1. はじめに

日本への仏教伝来は538年、552年説があるが、6世紀終わり頃の崇峻元年（588）、日本で初めて仏教寺院である法興寺（飛鳥寺）の造営が始まり、7世紀末頃の持統6年（692）には全国各地に545寺の仏教寺院が建立されたとされる（『扶桑略記』）。事実、日本各地で仏教寺院跡と考えられる遺跡（以下、『古代寺院』という。）がこれまでに多く発掘調査されており、奈良文化財研究所「古代寺院遺跡データベース」を参照すれば500を大きく超える古代寺院が収録されている。北陸地方では、7世紀中頃に越前国丹生郡で深草廃寺がいち早く建立され、7世紀後半にかけて若狭から越後までの各地にいわゆる白鳳寺院が建立されたことが判明している。

古代寺院をめぐる考古学研究は長い蓄積があり、研究テーマも細分化され、多岐にわたっている。例えば寺院を構成する伽藍建物の配置（伽藍配置）に関するものや、出土瓦の編年、文様・型式の分布と展開（伝播）に関するものは一例であるが、近年では古代寺院の立地や景観に関する議論を盛んで、網伸也氏、山路直充氏、梶原義実氏らの精力的な研究が知られる（網2001・2006、山路1999、梶原2017）。梶原氏の研究では全国各地の古代寺院の立地と景観を9分類しており（図1）、北陸の末松廃寺跡や興道寺廃寺についてもその立地や景観について論じているが（梶原2019）、ある程度広域的に地域を見渡した上で古代寺院をめぐる立地や景観について論じた先行研究はあまり多くない。

古代寺院は一般に豪族の拠点や交通の要衝の地に建立されたという指摘は多い（菱田2013など）。ただ、北陸地方では古代寺院そのものが他地域に比べて決して多いわけではなく、また山陰地方を含めた日本海沿岸地域では北陸道や山陰道といった官道（駅路）から離れて古代寺院が位置する、つまり仏教寺院と国家が敷設した公的な交通路が直結しない例もある程度認められる。

日本海沿岸の古代寺院の立地と景観を考古学や歴史地理学（『出雲国風土記』のように史料がある地域は歴史学を含む）などの学問分野から総合的に検討することは、地域での仏教寺院の造営原理、周辺施設（交通路、国府や郡家などの行政機関、豪族拠点など）との関係などを考える上で重要である。このような学際的な研究を今後進めていく上で、令和元年度は日本海沿岸地域の中でも報告者がフィールドとする北陸地方において古代寺院の立地と景観に関する基礎的な調査研究を行い、その様相を把握し、北陸地方における古代仏教寺院の立地と景観に関する特徴をあきらかにすることを目指した。

2. 調査研究の概要（現地調査、文献調査等）

本事業における令和元年度の調査研究は、北陸地方の平野部（平地）に所在する7～8世紀の古代寺院を主な対象とし、古代寺院の立地と景観を把握するために調査（現地調査、文献調査等）を行い、古代寺院それぞれ個別の、あるいは旧国単位などの地域的な特徴について検討した。また、得られた情報を周辺の交通路や官衙（国府・郡家）、国分寺などの関係遺跡との関係の中で考えることであきらかとなった成果を本報告にまとめた。

なお、国分寺、神宮寺、山林寺院、村落内寺院、様相が判然としない瓦出土地（瓦出土遺跡）等は調査研究の対象としていないが、可能な限りの現地・文献調査は行っている。今回は旧国・佐渡（佐渡島）での調査を行うことはできなかった。

文献調査では、新潟県、富山県、石川県、福井県の北陸道諸国（佐渡を除く）の古代寺院について、遺跡の位置、立地、伽藍や発掘で見つかった遺構・遺物、関係遺跡（国府・郡家、集落、古墳など）を把握するため、『自治体史』、『発掘調査報告書』、『学術論文』などの先行研究において概要を把握した。

現地調査では、北陸道諸国の古代寺院（現地）に赴き、微地形を確認しながらその立地を把握し、寺院から見える景観、あるいは周囲から寺院を見た景観について検討を行った。現地踏査等を行った古代寺院は国分寺、山林寺院等を含めて37か所、別表1のとおりである。

調査研究において予定した官道（北陸道）ルートや官道敷設前の古道の検討、古代寺院との関係については、あまり思うような成果が得られず、先行研究に従った部分が多い。

3. 調査研究の成果

（1）北陸地方における古代寺院の立地

7～8世紀に平野部に建立された古代寺院のうち現地調査を行ったのは、越後：横滝山廃寺、越中：御亭角廃寺、小窪廃寺、能登：能登国分寺跡（国分廃寺）、千野廃寺、柳田シャコデ廃寺、加賀：広坂遺跡、末松廃寺跡、保賀廃寺、弓波廃寺、津波倉廃寺、宮地廃寺、越前：篠尾廃寺、大虫廃寺、野々宮廃寺、深草廃寺、室谷廃寺、若狭：興道寺廃寺、太興寺廃寺、下タ中廃寺の20か所である。

これらの寺院は創建が7世紀中葉から8世紀前半に収まり、多くが地域の有力氏族の建立によるものと考えられる白鳳寺院である。白鳳寺院が建立される場所は、建立氏族の本拠地であったり、前代の古墳群の近郊であったり、主要交通路に近接することが想定されるが、その具体的な立地（寺院の建立場所）は地形や土地条件などに制限や影響を受けるものと考えられる。

現地調査において、これらの寺院の立地を概観すると、周囲からの眺望がよく、また周囲への眺望がよい独立低丘陵や低台地、河岸段丘などの微高地の上に総じて寺院が立地することが特徴である。上記の20の古代寺院のうち、大半がこの立地に該当する。周囲との眺望が強く意識されており、眺望を意識した微高地の適所が積極的に選地されていることがうかがえる。

このような古代寺院の立地上の特徴は当然、北陸地方に限らず、他地域における寺院の立地にも通じるものであるが、北陸地方の中でいくつか特徴的な事例も認められる。

まず、周囲よりも一段高い台地、丘陵上に立地し、高位に所在し、特に強く眺望が意識された古代寺院として、越後の横滝山廃寺、越中の御亭角廃寺がある。横滝山廃寺は小山状の独立低丘陵の上（写真1）に立地するが、丘陵の南側の標高が高いため、寺院の正面があったと考えられる丘陵の南側から寺院の伽藍を見通すことは難しく、また寺院からも南への眺望は乏しい。これは大和の当麻寺とよく似た立地である。横滝山廃寺の背面には信濃川が流れるので、景観との関係で言えば河川が意識されている可能性がある。御亭角廃寺は台地の先端付近（写真2）に立地し、谷部を挟んで南側には射水郡家の所在も推定されている。ともに寺院の正面から南側に向かう道が取り付いていたとは考えにくいので、寺院にアクセスするために伽藍と直交する東西道が取り付き、平野部と連絡しているものと考えられる。

平野部を望む山々の山裾の微高地に立地する古代寺院として篠尾廃寺、太興寺廃寺、下タ中廃寺がある。前面、側面、背面と違いはあるが、いずれかに山地や低丘陵をもつため、四方からの眺望は望めないが、平野部とのある程度の見通しは確保されている。前代の古墳群が分布するという特徴がある。

山々に挟まれた狭小な平地、谷筋などに立地する古代寺院に小窪廃寺、室谷廃寺がある。周囲に山地、丘陵が迫り、周囲との眺望は悪く、周囲からは隔絶されたような立地である。ただし、小窪廃寺は越中と能登との交通路、之乎路（志雄路）のルートが通過する狭小平野の谷筋に所在しており、寺院の眺望を意図的に周囲から隠すような印象は感じない。例えば丹波の和久寺跡も丹波と但馬との交通路に近接して寺院が建立されており、一山越えた隣の狭小平野には天田郡家と考えられる半田遺跡が所在する。

（2）北陸地方における古代寺院の立地と古代交通

北陸地方の古代寺院は他地域と比べて少なく、旧国単位で1～数か所であるところも多い。このような状況の中、郡内で複数の古代寺院が建立されている地域として若狭国遠敷郡、越前国丹生郡、越前国（後の加賀国）江沼郡などがあり、いずれも後に国府や国分寺が近くに置かれるなど各国の中心部である特徴がある。

若狭国遠敷郡は太興寺廃寺、下タ中廃寺が北川の中下流域に所在する（図2）。ともに近くを北陸道が通過し、また近くに北川が流れるという立地上の特徴がある。越前国丹生郡では大虫廃寺、深草廃寺、野々宮廃寺が建立されており（図3）、やはり近くに北陸道や日野川が位置する。江沼郡では海岸部、潟湖の近くの北側のエリアに宮地廃寺が建立され、郡南方の山寄りのエリアに北陸道の近くに保賀廃寺、弓波廃寺、津波倉廃寺が建立されている（図4）。江沼郡の南北のエリアに寺院の建立が認められ、近年の研究ではそれぞれのエリアに北陸道が通過していた可能性が指摘されている（鈴木2017、安中2019）。

上記の3つの地域を概観すると、それぞれ北陸道が位置し、これが前代からの主要交通路を踏襲している可能性を考えると、従前より指摘される古代寺院と交通路との密接な位置関係が北陸地方においても認められるものとして注目されるが、陸上交通のみでなく水上交通との結節点に古代寺院が造営されている可能性も想定される。

例えば若狭国遠敷郡では、船着き場と考えられる湿地状遺構が見つかり、河川の港湾施設の一部と考えられる高塚遺跡が太興寺廃寺の北西方に位置し、北川を遡り、三方郡との郡境には下タ中廃寺が所在する。越前国丹生郡は河川の津湊の様相はあきらかではないが、丹生郡中心部の北側には式内・舟津神社を含めて「船津」という地名が残り、三国湊から九頭竜川を得て日野川を遡上した上流に国府が位置することを考えると、福井平野を縦断する大規模な河川交通網が存在した可能性は高い。このような河川交通と北陸道の丹生駅との結節点付近に国府がおかれ、前述の3つの寺院が位置しているものと考えられる。また、宮地廃寺が所在する江沼郡の北側のエリアはまさに潟湖が広がっている。

これ以外にも、若狭国三方郡の久々子湖と興道寺廃寺、越前国（後の加賀国）加賀郡の広坂廃寺と戸水C遺跡、戸水大西遺跡などの河川の津湊の遺跡、あるいは越後国古志郡の横滝山廃寺と信濃川といったように、河川や潟湖を通じた水上交通と古代寺院との関連性は十分に想定できる。寺院造営技術が港湾施設の整備に一定の役割を果たした可能性を含めて、その有機的な関係に注意を払う必要がある。

（3）北陸地方の古代寺院をめぐる景観

古代寺院の立地が周辺との眺望と密接な関係があることは前述したが、高層建物である塔や伽藍を備えた装飾性豊かな寺院建物群はまさに地域社会でランドマークとしての役割を果たしたものと考えられる。ランドマークの定義の一例を挙げれば、地理的空間（自然的・人文的空間）の中で、場所性、象徴性、記号性、視認性・認知性を備えたものとして位置づけられている（津川2007）。まさに古代寺院が備える特徴を併せもっている。

北陸地方は日本海に面し、列島全体で見た場合、北側に向かって標高が低くなり海岸部へと至る「北下がり」の地形をもつ。このことは、寺院の正面が南側であるとすれば、極端に言えば坂を下って寺院の南門に至るということになる。

河川流域の平野単位で広く概観すれば、例えば国境を越えて山々に沿って河川の傍らを下っていくと眼下に古代寺院が所在する平野を遠望し、その平野の地形的な高まり、微高地などに古代寺院が立地しているという景観が復元できる。具体的には、若狭の興道寺廃寺では近江国境を越えて耳川沿いに下っていくと河岸段丘の最高位に寺院が立地しており（写真3）、越中の御亭角廃寺では俱利伽羅峠を越えて石動山東麓を射水川、庄川に沿って下っていくと伏木台地の先端に寺院が立地する。また、越後の横滝山廃寺も古志郡家と考えられる八幡林遺跡から下っていくと信濃川付近の独立小丘陵に寺院が立地する。

このような景観は見晴らし（ビュー）が確保されており、前に開けた展望をもつ（樋口 1975）。「北下がり」の地形であるゆえに、結果として古代寺院をとりまくこのような景観が形成されたものと考えられるが、平野部に至ってから微高地上に立地する寺院を見上げながら正面から近づくとビスタ（視軸）が確保されることとなる。全てがこのような景観上の仕掛けを意図して寺院の選地が図られたとは考えにくい、古代寺院が地域社会のランドマークとして機能していたことはあきらかである。

先に取り上げた興道寺廃寺や御亭角廃寺、横滝山廃寺、これ以外にも太興寺廃寺や保賀廃寺など、寺院の側面や背後に河川が流れるなど水上交通の移動から寺院の側面や背面を見せようという意図もあったのかもしれない。その場合、自らが多角的に移動することで視線の連続的変化が生じるシーケンスという見え方が存在することとなる。古代寺院をとりまく景観、見え方はその立地や自然環境によって多様であるものと考えられる。

4. おわりに

今回の調査研究において、実際に北陸地方の古代寺院を網羅的に踏査し、それぞれの古代寺院や地域を比較することで、特に7～8世紀に平野部に建立された古代寺院の立地と景観について、いくつかの特徴がおぼろげながら見えてきた。しかし、前章までに概述した見解は報告者の雑感に過ぎず、今後の調査研究の視点を提示したに過ぎない。周辺の関係遺跡との関係を含めてさらに検討を深めたい。

報告者は勤務する自治体でこれまで古代寺院（興道寺廃寺）の発掘調査に携わっており、平成30年に国史跡に指定された後、令和2年3月にこの保存活用計画を策定したが、今回、北陸地方の古代寺院を数多く踏査する中で、興道寺廃寺と比較して改めて興道寺廃寺の特徴を理解することができた。また、それぞれの古代寺院を訪れることで、遺跡をとりまくさまざまな環境に触れることができ、保存活用計画の策定にあたって大変参考になった。今回の調査研究を行う機会を与えていただいた日本海学推進機構の皆様、富山県民の皆様にお礼申し上げます。

引用・参考文献

網伸也「畿内における在地寺院の様相」『古代』110、早稲田大学考古学会、2001。

網伸也「景観の見地からの伽藍配置」『考古学ジャーナル』545、ニューサイエンス社、2006。

梶原義実『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館、2017。

鈴木景二「3 北陸道の交通と景観」『日本古代の道路と景観 一 駅家・官衙・寺一』鈴木靖民・荒木敏夫・川尻秋生編、八木書店、2017。

津川康雄『地域とランドマーク 象徴性・記号性・場所性』古今書院、2003。

津川康雄「1章 都市景観におけるランドマーク」『都市の景観地理 日本編1』古今書院、2007。

津川康雄『ランドマーク ―地域アイデンティティの表象―』古今書院、2018。

菱田哲郎「古代寺院と地域社会 ―交通機能を中心に―」『古代寺院と律令体制下の京都府 ―なぜそこに寺はあるのか―』
2013 京都府埋蔵文化財研究会

樋口忠彦「8章 ランドスケープの空間的構造のまとめ」『景観の構造 ランドスケープとしての日本の空間』枝報堂出版、
1975。

北陸古瓦研究会『北陸の古代寺院 その源流と古瓦』柏書房、1987。

安中哲徳「能登・加賀の古代道路遺構」『第7回石川考古学研究会・富山考古学会合同例会 道路遺構の考古学』石川考古学研究
会・富山考古学会、2019。

山路直路「関東地方の伽藍配置 ―8世紀以前について―」『シンポジウム古代寺院の伽藍配置』帝塚山大学考古学研究所、
1999。

別表1 現地調査を実施した寺院遺跡一覧

番号	旧国	寺院（遺跡）名	所在地	立地	時代	伽藍	遺構	備考
1	越後	横滝山廃寺	新潟県長岡市	丘陵	7c末～10c	不明	木製基壇外装	
2	越後	本長者原廃寺	新潟県上越市	河岸段丘縁辺	8c2/2カ	不明	基壇1基	塔跡カ、越後国分寺カ
3	越後	法花寺遺跡	新潟県上越市	丘陵	12c	不明	礎石建物跡	越後国分尼寺カ
4	越中	寺家廃寺	富山県南砺市	扇状地末端	平安時代カ	不明	塔心礎	
5	越中	御亭角廃寺	富山県高岡市	台地	7c2/3	不明	溝	寺院南限溝？
6	越中	越中国分寺跡	富山県高岡市	台地	8c2/2カ	国分寺	金堂・塔・中門・講堂・南門等の基壇	
7	越中	小窪廃寺	富山県氷見市	緩斜面平坦地	8c1/2	不明	塔心礎	
8	能登	能登国分寺跡	石川県七尾市	平地	8c～10c	法起寺式	金堂・塔・中門・講堂・南門等の基壇	
9	能登	千野廃寺	石川県七尾市	低台地	7c2/2～8c	不明		能登国分尼寺カ
10	能登	柳田シャコダ廃寺跡	石川県羽咋市	台地	7c2/2～平安カ	法起寺式カ	塔基壇、掘立柱建物跡ほか	転用神宮寺カ
11	能登	杉野屋専光寺遺跡	石川県宝達志水町	丘陵裾部	7c1/2～10c末	不明	掘立柱建物群	墨書土器「東院寺」
12	能登	福水ヤシキダ遺跡	石川県宝達志水町	山間部	平安初期	不明	井戸	銅三鈷鏡、銅錫杖頭、銅鏡
13	加賀	広坂廃寺跡	石川県金沢市	段丘辺縁部	7c2/2～11c	不明	基壇1基	
14	加賀	加茂廃寺	石川県津幡町	低湿地	8c末～10c1/3	不明	基壇カ	墨書土器「鴨寺」「馬部寺」
15	加賀	三子牛ハバ遺跡	石川県金沢市	山間部	8c2/2～10c初	不明	礎石建物跡	墨書土器「三千寺」
16	加賀	観法寺	石川県金沢市	山間部	8c	不明	礎石建物跡、井戸、道路遺構	
17	加賀	末松廃寺跡	石川県野々市市	扇状地扇央部	7c2/2～11c	法起寺式	金堂・塔・中門・講堂等の基壇	
18	加賀	宮竹うっしょやまA遺跡	石川県能美市	山間部	8c3/3～12c	不明	掘立柱建物跡、配石遺構	墨書土器「大坂寺」
19	加賀	浄水寺	石川県小松市	緩斜面	9c2/2～11c1/2	不明	井戸、地鎮遺構	墨書土器「浄水寺」「佛」
20	加賀	里川E遺跡	石川県小松市	山間部	9c3/3～10c初	不明	掘立柱建物跡、礎石建物跡	
21	加賀	松谷廃寺跡	石川県小松市	山間部	8c2/4～8c4/4	不明	礎石建物跡	
22	加賀	保賀廃寺	石川県加賀市	平地	7c3/3	不明	南北約160m、東西約180mの寺域カ	
23	加賀	弓波廃寺	石川県加賀市	洪積台地	7c末～9c	法起寺式	金堂・塔・中門・講堂等の基壇	
24	加賀	津波倉廃寺	石川県加賀市	低台地	7c3/3	不明		付近は郡家推定地
25	加賀	宮地廃寺	石川県加賀市	台地	8c初	不明	塔心礎ほか	
26	加賀	高尾廃寺	石川県加賀市	台地上	平安中期～	不明	基壇1基	
27	越前	てんのう堂遺跡	福井県坂井市	扇状地	不明	不明		女形谷廃寺
28	越前	篠尾廃寺	福井県福井市	緩斜面	7c3/3	不明	塔心礎	
29	越前	大虫廃寺	福井県越前市	扇状地末端	7c3/3～8cカ	不明	塔基壇	
30	越前	野々宮廃寺	福井県越前市	扇状地扇央部	7c3/3	不明		
31	越前	深草廃寺	福井県越前市	沖積地	7c2/3～8c	不明	基壇カ	越前国分寺説
32	越前	室谷廃寺	福井県越前市	谷間	8c2/2～平安初	不明	塔心礎	
33	若狭	興道寺廃寺跡	福井県美浜町	河岸段丘	7c3/3～10c初	法起寺式	金堂・塔・講堂・中門・南門等の基壇	
34	若狭	太興寺廃寺	福井県小浜市	平地	7c3/3～8c	不明	塔心礎	
35	若狭	下夕中廃寺	福井県若狭町	緩斜面	7c3/3～8c	不明		
36	若狭	若狭国分寺跡	福井県小浜市	平地	8c2/3～10c2/3	国分寺	金堂・塔・中門・南門等の基壇	
37	若狭	若狭神宮寺跡	福井県小浜市	緩斜面	8c2/2～	不明	塔基壇	

時代は、1/2区分は前半・後半、1/3区分は前葉・中葉・後葉、1/4区分は四半世紀を示す。

選地パターン	地 形	周辺施設	選 地 の 特 徴	選地からみた寺院認知
官衙・官道隣接型	沖積低地・段丘上等	国府・郡家・官道・集落	国府・郡家など官衙遺跡や、主要官道に隣接。公的拠点および陸上交通路からのアクセスを重視した選地。	国分寺の選地はほぼこれ。不特定多数の人々の参集が容易で、国家仏教の拠点としてのモデルケース的な選地。
河川型	河川堤防・河川沿いの低位段丘端部等		河川はおもに舟運で物資を運ぶ国内交通路。水上から伽藍を眺める視点を重視した選地。	アクセス性は高くなく、造営者の権力の象徴としてのモニュメント的意味合いが強い。見せる対象は限定的。
港津型	河口付近の台地上等	港津・集落	海港や湖津に隣接。国外への物資の集散地であり、郡家別院 国府津など公的機関が設けられる例も。	おなじ河川流域の選地でも 河川型よりも公的色彩が強く 官衙官道隣接型に近い。
眺望型	段丘端部・低丘陵端部等	条里地割	丘陵頂部や段丘裾部など、周囲の集落や条里(水田地帯)を、高地から広く見渡せる選地。	河川型と同様、地域内のモニュメント的色彩が強い選地。河川型より見せる対象はさらに限定される。
開発拠点型	段丘上・扇状地・沖積低地等	集落・条里地割	条里地割が敷設された沖積低地や扇状地など、水田地帯の微高地を選地し、複数寺院が密集して造営。	モニュメントや宗教拠点としては寺院数が多く、高燥地を中心としたあらたな水田開発に伴い、寺田としての確保という経済的事情も存在か。
水源型	扇状部・段丘端部 湧水点等	条里地割	小河川が山地から平野部に流出する扇状部やその付近を選地。農業用水の湧出地を扼す役割か。	農業開発と濃厚にリンクするが、開発拠点型よりも伝統的な湧水祭祀の役割を引き継ぐか。
聖域型	山 麓	古 墳	前面に河川、背後に山を背負う狭隘な選地。後背山林には古墳が築造される例も。集落や条里からの隔絶。	「俗界」と隔絶し、古来の山岳信仰や祖先信仰等との融合。聖域的な場。寺院への視点はかなり限定され、対象は限定的。
山林寺院	山 林		平野部から遥かに隔絶した山中に造寺。アクセス性は低く また周囲から伽藍を見渡すこともできない。	山岳信仰や境界祭祀などと関わり。奈良期にはその一部が、僧尼の修行の場として国家仏教の中に包摂。
村落内寺院	沖積低地・段丘上等	集 落	集落内に造営された小堂的な建物。非礎石建・非瓦葺で、墨書土器の内容から仏教施設と知れる例も多い。	モニュメントとしての意味合いは皆無で、集落の住民たちの純粋な宗教施設。

図1 古代寺院の選地パターンとそこから想定される寺院認知(梶原2017)



写真1 横滝山廃寺を北から望む



写真2 御亭角廃寺を南から望む

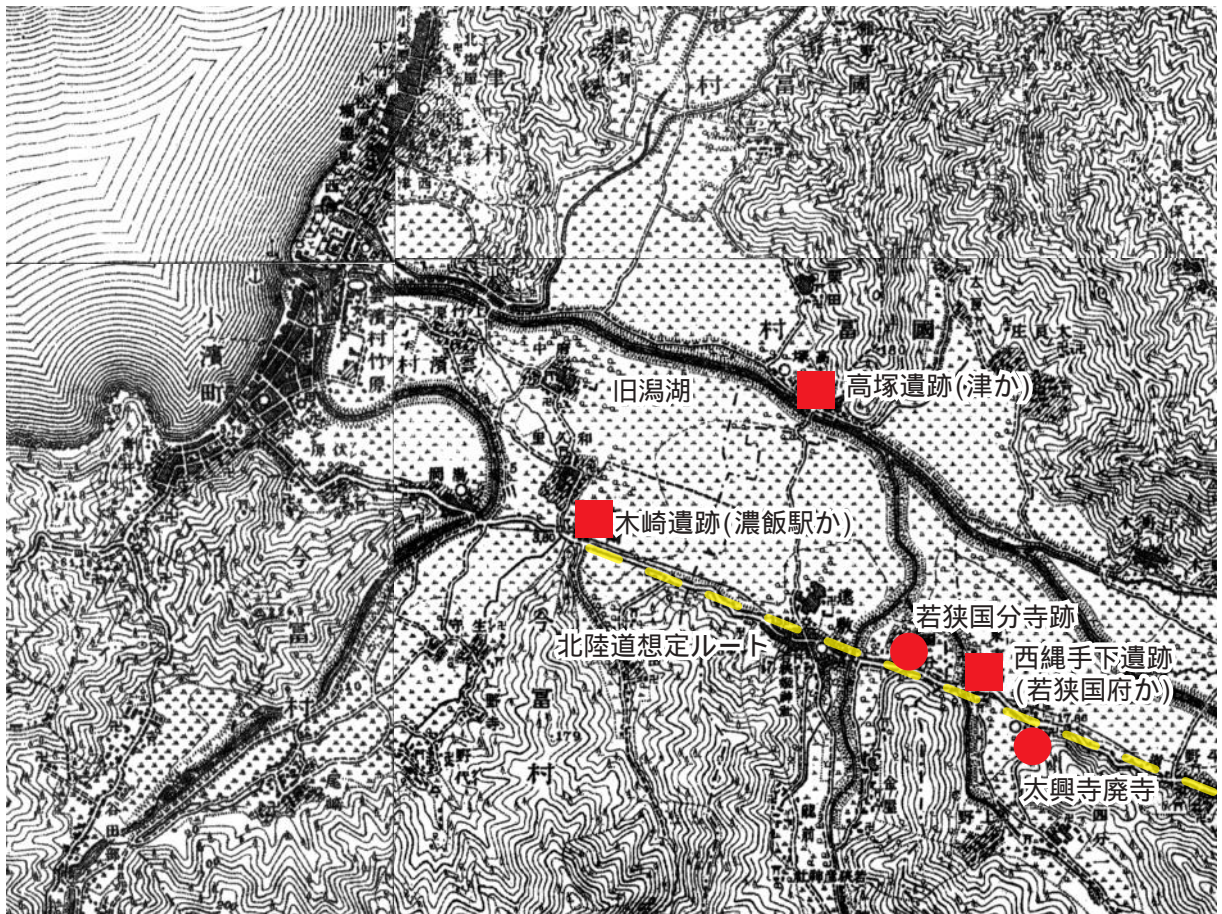


図2 若狭国遠敷郡の古代寺院と周辺の交通 (縮尺1/50,000)

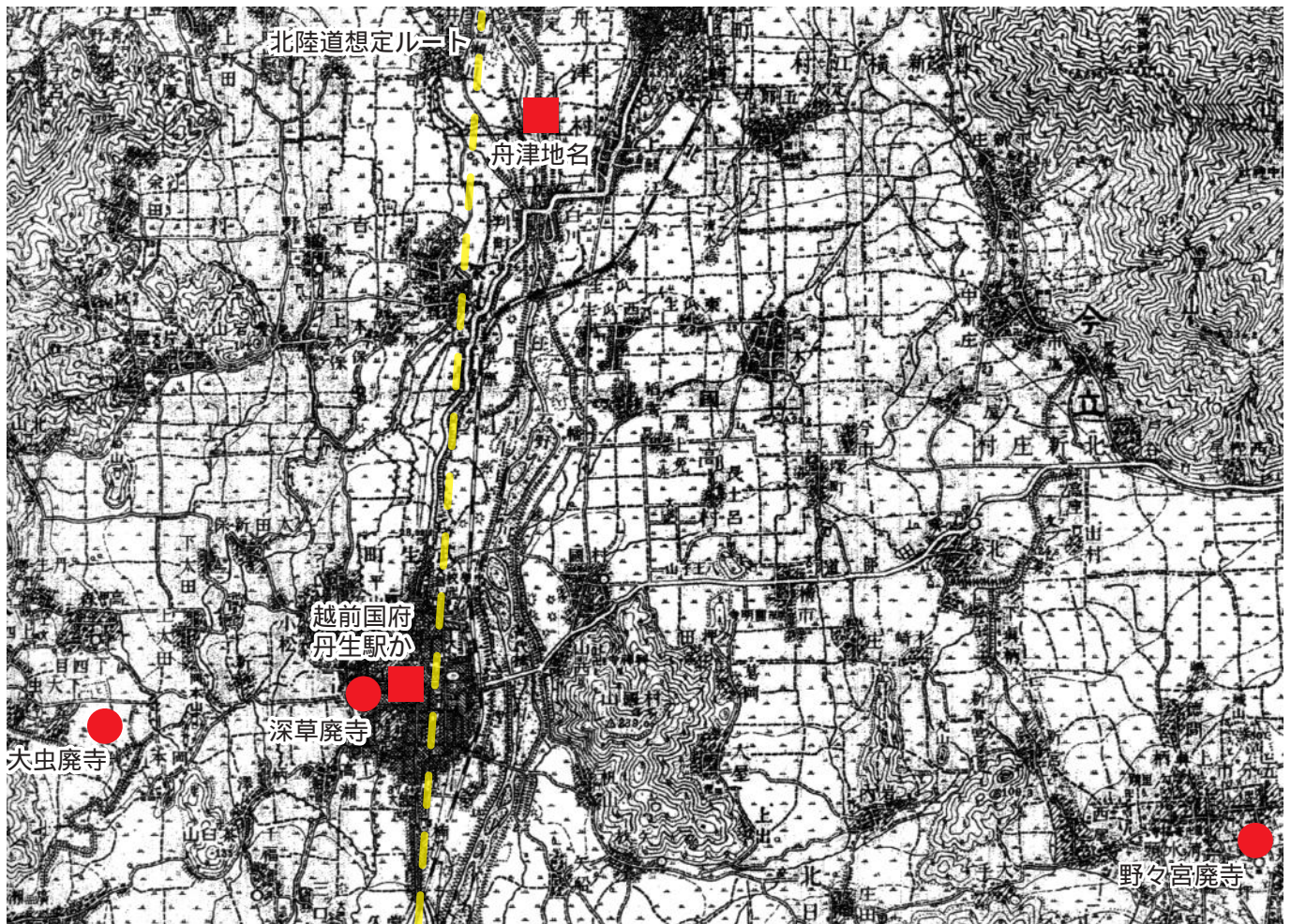


図3 越前国丹生郡の古代寺院と周辺の交通 (縮尺1/50,000)

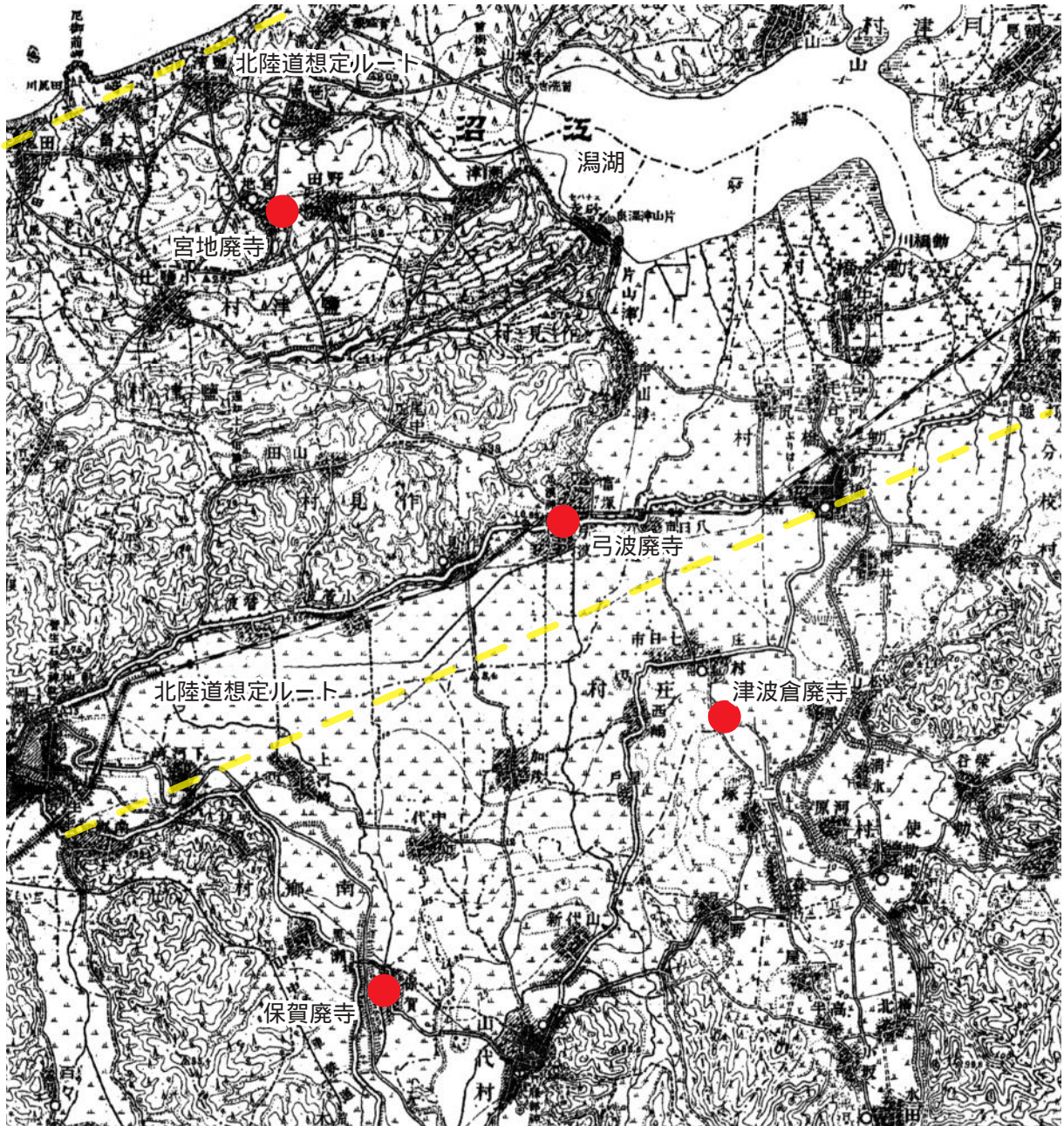


図4 加賀国江沼郡の古代寺院と周辺の交通（縮尺1/50,000）

	パノラマ(展望)	ビュー(見晴らし)	ビスタ(視軸)	シークエンス(視線の連続的变化)	
パターン					視点 ○ 視線 — 視角 △
内容	前面のみでなく開けた展望	前に開けた展望	特定の方位・対象への視線の確保	同一主体の行動などの時間的変化をもつ視線・視角	

図2.4 見方の4タイプ

図5 見方の4タイプ(樋口1975)



写真3 興道寺廃寺を南から遠望する